



ashiyasu

ひいろ 緋色
こきひ 深緋
べにひ 紅緋
あかくちば 赤朽葉
きあか 黄赤
あかだいたい 赤橙
やまぶきいろ 山吹色
とうおう 藤黄
きくちば 黄朽葉
かんぞう 萱草
こうじいろ 柑子色

だいたいいろ 橙色
しのめいろ 東雲色
しんく 漆黒
しんく 紫黒



takao homijinja

きはだいろ 黄檗色
さくちなし 黄支子
ちゆうき 中黄

紅葉する葉があれば、黄葉する葉もあります。黄赤、赤橙、山吹色、藤黄、ややくすんだ黄朽葉色、萱草色や柑子色に彩られた森を愛でるのは、この季節の最高の贅沢かもしれません。

人工的なライトに照らされた夜も、昼とはまた違った秋の色が見つげられます。毎年11月下旬には高尾山穂見神社の夜祭が行われ、神楽殿で太々神楽が奉納されます。神楽では、白色の狐面を被った舞人が黄色の衣装に身を包み、ユーモラスな動きで人々を幻想空間に誘います。黄色は光のあたり方によってその趣を変え、中黄へ、黄檗色へ、黄支子色へ、めくるめく変化を見せます。その幻想とともに、晩秋の夜はさらに深く深く更けていくのです。

いつも見る風景を和の色名で感じてみてはいかがでしょうか。四季のある日本の風景を、繊細に見つめてきた先人のまなごしに気づくことができます。



takedagaki

かきいろ 柿色
てりがき 照柿
あらいがき 洗柿
しやれがき 洒落柿
うすがき 薄柿
みずかき 水柿
かきしぶいろ 柿渋色
かきちや 柿茶

寒さが忍び寄り、季節は冬の扉を開きつつあります。去り行く秋に思いをはせながら、今回は和の色名に注目して、身近な秋色を探してみました。

秋といえば、まず食欲の秋、おいしいものがあふれる爽りの季節にひとときわ鮮やかな色を見せるのは、果物の柿でしょうか。「原七郷は月夜でも焼ける」と言われた御勅使川扇状地では、柿は古くから主要作物として栽培され、江戸時代には甲州八珍果の一つにも数えられました。現在も市内をぶらりと歩くと、まさに柿色に染まった柿畑に出会います。一口に「柿色」と言っても、実は、完熟した赤を表す「照柿」、淡い赤色の「洗柿」や「薄柿」、「洒落柿」、深く茶色味を帯びた赤の「柿渋色」、「柿茶」など、柿の色は、赤から橙、茶色への微妙な色合いを表現する和色として使われました。

柿を頬張り、食欲を満たしたところで西の山々に目を向ければ、そこにもまた秋色に染め上げられた里山を築むことができます。モミジは真っ赤な緋色に色づいているでしょう。やや紫がかった深みを見せる深緋はガマズミでしょうか。ハゼノキは黄色みを帯びた紅緋に、カエデはほんのりと赤朽葉に染まっています。

素描 和色が誘う秋色の風景

signs of autumn

